Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

Serum uric acid levels and long-term outcomes in chronic kidney disease.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮岡, 統紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31332

主 論 文 の 要 約

Serum uric acid levels and long-term outcomes in chronic kidney disease.

（慢性腎不全患者における血清尿酸値と長期予後）

東京女子医科大学大学院
内科系専攻内科学（第四）分野
（指導：新田孝作　教授）
宮岡　統紀子

【目的】

血清尿酸値は糸球体濾過量の低下に伴い2次的な上昇を認められることが多い。高尿酸血症は動脈硬化を進展させ心血管疾患の危険因子となることが指摘されているが、慢性腎不全患者において予後および腎機能増悪因子としての関連は明らかにはされていない。本研究では慢性腎不全患者における血清尿酸値と長期予後および慢性腎不全進行との関連について評価した。

【方法】

2005年9月から2006年10月の間に登録された当院外来通院中の慢性腎不全stage2-4の患者511人を対象とし、Coxハザードモデルを用いて血清尿酸値と全死亡率、心血管死亡率、末期腎不全、糸球体濾過量（eGFR）の50%以上の低下のリスクとの関連を評価した。

【結果】

尿酸値の中間値は6.57±1.35 mg/dl、eGFR中間値は42.02±18.52ml/min/1.73m2であった。6年間の観察期間において31人が死亡し、内19人が心血管関連死であった。まず尿酸値3分位として最も低値の群とその他の各群における全死亡率、心血管死亡率、末期腎不全、50%以上のeGFRの低下について、心血管ﾘｽｸ因子、腎ﾘｽｸ因子およびアロプリノールの内服において調整したが、いずれも

関連は認めなかった。さらに高尿酸血症群（尿酸値＞7.0 mg/dl もしくはすでにアロプリノール治療を受けている）を正常群と比較したところ、背景因子で調整を行わない場合いずれも有意差を認めなかったが、性別、喫煙、心血管リスク因子、腎疾患的背景因子、アロプリノールの使用について調整を行ったところ、全死亡率と心血管死亡率が高尿酸群で有意に高く、末期腎不全と 50%以上の eGFR の低下のリスクについては有意差を認めなかった。

【考察】

高尿酸血症は、腎内の動脈病変の有無とも関連が指摘されており、動物モデルにて動脈硬化性変化を認めることが明らかにされている。高尿酸血症は血管リスク因子として予後に影響するものと考えられた。また、今回は慢性腎不全の進行との関連は示されなかったが、これまでの報告と同様の結果であった。糸球体濾過量の低下に伴い尿酸の排泄も低下するが、腎障害初期では腸管からの排泄亢進を認めるため疫学的な評価を困難としている可能性が考えられた。

【結論】

心血管リスク、腎疾患的背景およびアロプリノールの使用について調整を行ったところ、高尿酸血症の存在が CKDstage2-4 の患者において全死亡率、心血管死亡率に関与していると示された。